



Title	都市とファッション：ファッションの背景としての都市・建築/三輪町複合施設 めくばーる三輪 ファッションとしての建築/V0ビルディング
Author(s)	徳岡, 昌克
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53132
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

都市とファッション

ファッションの背景としての都市・建築／三輪町複合施設 めくばー三輪 (竣工1999.3)

徳岡昌克／徳岡昌克建築設計事務所

敷地は、東は既存の公民館、ホール、働く婦人の家、役場などに近く、北は山並みを望み、南西は春には雲雀のさえずりが聞かれる田園風景につながっている。ここに老人福祉センター、健康福祉館、町民ホール、学習館、図書館からなる複合施設を、との企画であったため、かねてから都市や街づくりについて考えてきたことを実現できるのではないかと期待があった。つまり、個々の建築物が構成する街区や都市をメカニズムとして論ずるだけでなく、視覚的イメージ、風景としてとらえてみたいと思っていた。

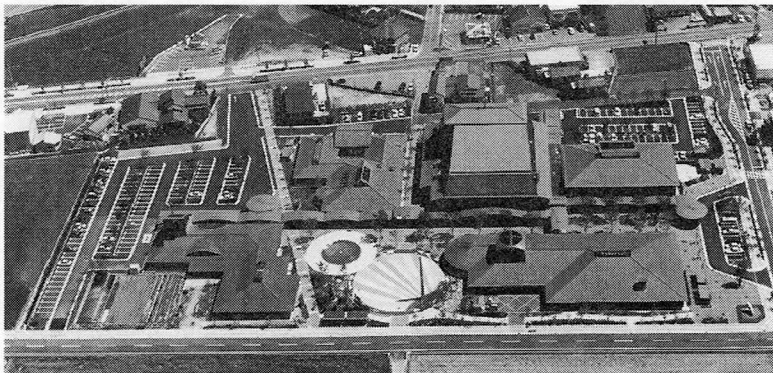
三輪町は「邪馬台の里」と称せられるほど詩情豊かな史跡や風景に恵まれているが、町の中心となる街区はいま形成されてはいない。これだけの施設を一挙に完成させるのだから、町みんな、あるいはここを訪れる人たちがちょっとおしゃれをして楽しく集い、良好なコミュニティ形成に寄与するような、またファッションの背景となるような街区を作ってみようと思った。生き物のように街区や都市が新しい建築行為を許し、その魅力を持ち続けていくための布石として、緑、道、広場を計画して、そこに部分としての各施設を張り付けてみた。こうしておけば全体としての街区や都市はニーズに即してその魅力をもち続けられるのではないかと期待した。

緑豊かな都市景観を形成するために、緑を育てる太陽や風雨の向きに留意し、この地の地理的特徴をにらんで、シンボルとなっている目配山への視線を通し、城山にも視界を開いて敷地内の広場から望む山を背景にした風景に配慮した。

本計画では、敷地の東側にある既存の町施設に近い側を文化ゾーン、西側を福祉ゾーンとして位置づけ、文化的色合いの濃い町民ホール、学習館、図書館と、老人福祉センター、健康福祉館のふたつの主な機能が社会的教育という絆で結ばれた複合施設としてとらえ、集落配置している。各施設は、方位に対し約40度振られているため、2面がおのおの南東および、南西に向くことになり、終日日影となる部分をほとんどなくすることが可能となり、植生を助長できると考えた。町民ホールと学習館の間に路地を設けたが、それは「情報の小道」と名づけられ、図書館に至る。

わが国では、街道が流通・文化・情報の発信基地となっていたことに思いを馳せた。この3館にはそれぞれ大通りに面して企画展示コーナーを設けた。町民ホールのホワイエは大通りに面し、大きく開放されて、種々の催しに対応できるようにした。各施設は豊かな屋外空間により連結されるよう試みた。

こうして、この境界の人々の移動につれて土地の歴史に関連づけられたさまざまな風景が現れ、歩いていて楽しい空間となるよう、また各建物も自己主張を少し押さえて、長くファッションの背景として生き続ける建築に徹するデザインを心がけた。そのため、耐久性に優れた銅板葺きの勾配屋根や煉瓦積みの外壁などの落ち着いた集落建築群とした。自然採光、自然換気、自然排煙、外気冷房等、環境共生手法を有効に活用したデザインを心がけた。



三輪町複合施設～めくばー三輪～

ファッションとしての建築／VOビルディング (竣工1998.11)

全国で事業を展開しているクライアントが、発祥の地である大阪、北新地で建替を計画し、コンペの結果我々の案が採用された。クライアント並びに旧VOビルは地域の先導的役割を果たしてきたという歴史があり、このプロジェクトは中心市街地の活性化のための最初のステップと位置付けられる。計画に際しメモリアルビルとしてメッセージ性の高いランドマークとなる建築を目指した。

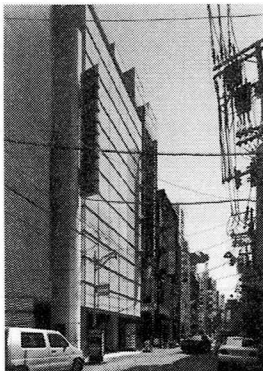
構成は各階とも飲食店舗のテナントビルであり、2階より上は1フロア1〜3店舗の配置が可能なプランとしている。構造は地上部分は鉄骨造、地下は既存躯体を土留めとして利用し、内側にRC造の壁を配した二重壁としている。このビルは数多くのネオンがあふれる人通りの多い賑やかな通りに画しており、複雑で奇抜な形態や、異なった材料でファサード面を分割するようなデザインはかえって混乱に埋没してしまい効果的でないと考え、敢えて和紙調合わせガラスとステンレスフレームのシンプルなデザインを選択した。メッセージ・ウォールと名付けられた可変性のあるガラスのファサードは、昼間はフレームのプロポーション、エッジのディテールに留意した面の構成によって日本の“障子”のイメージを表現し、夜間はデータ入力された2000パターンの照明が多様な表情を映し出す。この調光システムは4つのタイプの光源で構成され、光の3原色、赤、緑、青のアクリル製のカラーチューブに包まれた調光トラフ（1つは裸のまま白を用いて）があらかじめコンピュータープログラミングされたパターンを自動的に点灯させる。

大都市においては、人工的な環境の中で季節の移ろいを感じる事が難しいため、秋には紅葉のイメージ、夏には若葉や青空のイメージというようにこのファサードで季節感の演出を試みた。

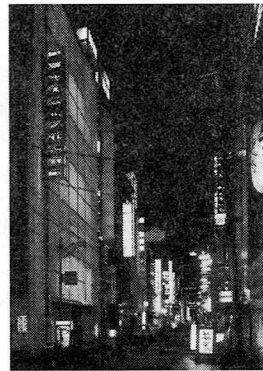
“光”という普遍的なテーマを最大限に利用することで、空間は訪れる、また通り過ぎる人々に新たな出会いと発見を演出する装置となる。建物とメッセージ・ウォールとの間にはガラス屋根の架かった吹き抜けがあり、そこからの眺めは、丸窓から光が漏れ、外部とはまた違った雰囲気をもたらす。

建築の種々のサイクルを考え、耐久性のある構造体と、部材、設備の可変性を考慮した。商業建築においては、客やオーナーの関心を保持し続けることが不可欠であり、改修・更新の際には、他店の営業を妨げずに工事が出来るよう、設備用の配管トレンチは床下に、パイプシャフトは共用部に面して配した。建物全体の建替えを不要とすることで、クライアントに対しては建設コストの減少をもたらす、環境に対する負担も軽減できる。建物のスクラップアンドビルドを避けることは、サステイナブル・デザインを考えるうえでも大変重要である。商業空間もサービスを提供する単なる器ではなく、その質が重要である。

量から質の時代といわれて久しい今日、建築家は質の高いサービスに基づいた生産をいかにデザインするかを考えていかなければならない。



VOビル昼景



VOビル夜景